

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520284

研究課題名(和文) 20-21世紀アメリカ演劇の政治学研究 1900年からポスト9.11

研究課題名(英文) Political Studies of 20th-21st Century American Drama: 1900 to Post-9/11

研究代表者

貴志 雅之 (KISHI, MASAYUKI)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：30195226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀転換期以降のアメリカニズムの世界的影響力を問題とし、「アメリカ演劇のノによるアメリカ文化研究」の志向性を基調に、アメリカ社会の支配的パラダイムとの対抗/共犯関係から捉えた20-21世紀アメリカ演劇の政治学(政治的意識/無意識、政治的イデオロギーとアクティヴィズム)を、人種、ジェンダー、クイア、帝国主義、資本主義、戦争、災害、他者をキーワードに社会文化的コンテクストの視座から明らかにするとともに、演劇政治学を展開する劇作家の「劇作の政治学」を検証した「20-21世紀アメリカ演劇の政治学研究」として発表した。

研究成果の概要(英文)： My research has considered the worldwide influence of Americanism since the turn of the 20th century and has addressed the “Politics” (political conscious/unconscious, political ideology and activism) of 20th-21st century American drama in its rivalry and complicity with the dominant paradigm of American society. Thus, on the basis of the orientation of “American Studies of/through American Drama,” my studies have elucidated the “Politics” of American drama in this period from a sociocultural perspective, centering on race, gender, queerness, imperialism, capitalism, war, disaster and the Other, as well as the “politics of playwriting” of those playwrights who practice drama politics in their works. A series of articles and co-authored books have been published.

研究分野：人文学

キーワード：20-21世紀アメリカ演劇の政治学 劇作の政治学 アメリカニズム 人種 ジェンダー クイア 帝国主義 戦争

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀以降、アメリカ覇権主義の政治的力の介在を問題化してきたアメリカ演劇は、国家・社会に対抗/共犯し、多様な政治的アクティビズムを展開してきた。アメリカ演劇の政治性の議論は、冷戦終結後1990年代以降、人種、ジェンダー、クイア等の演劇研究の主要テーマとして活発化し、多様な射程から演劇の政治学を打ち出した。一方、文学作品に内在する「政治的無意識」を重要視する研究動向のなかで、文学・文化批評は「理論」偏重から「政治学」へのシフトを加速させ、文学の政治・文化研究はいっそう活発化する。こうした状況が、アメリカ演劇の政治学研究を目指す本研究の着想当初の背景である。

(2) 自身の研究では、2つの共同科研「現代アメリカ文学における身体意識の変容とメディアとの関係」(2003-2006)と「アメリカ文学における銃の表象とアメリカの神話の関係に関する研究」(2005-2008)の一環で行った研究が本研究の萌芽となった:(1) アフリカ系アメリカ演劇の人種、ジェンダー、歴史を考察したオーガスト・ウィルソン研究(共著『ジェンダーとアメリカ文学』[勁草書房、2002]所収)(2) 日系アメリカ人の歴史的記憶の再現と継承問題を扱った日系女性アメリカ演劇研究(共著『スモールタウン・アメリカ』[英宝社、2003]所収)(3) クイア、AIDS、冷戦終結を中心に歴史認識・表象を検討したトニー・クシュナー研究『『エンジェルズ・イン・アメリカ』の女性たち』(『アメリカ演劇』第16号所収、全国アメリカ演劇研究者会議、2004)そして(4) ヨーロッパ・アメリカの帝国主義の演劇表象研究(共著『神話のスパイラル—アメリカ文学と銃』[英宝社、2007]所収)である。これらによって進展したアメリカ演劇の政治性に関する研究成果を貴志雅之編著『二世紀アメリカ文学のポリティクス』(世界思想社、2010)として刊行し、同書所収論文「アメリカ演劇、亡霊の政治学—冷戦・クイア・ポスト冷戦」が本研究課題「20-21世紀アメリカ演劇の政治学」の基礎研究となって、本研究構想が熟成された。

## 2. 研究の目的

研究対象とする時代を大きく3期(第1期、20世紀転換期から第2次世界大戦;第2期、第2次世界大戦終結から冷戦期;第3期、ポスト冷戦から9.11を経て現在)に分割し、各時代について、人種、ジェンダー、クイア、帝国主義、資本主義、戦争、他者をキーワ

ードに、作品、劇作家の第1次資料、劇作家・作品に関する先行研究と関連文献及び批評理論、劇作・上演に関わる文献・メディア資料、そして歴史・社会・政治・文化的資料を分析・検討し、アメリカの支配的パラダイムとの対抗/共犯関係から捉えた演劇の政治性・政治戦略を探った。また以下の4項目に留意した:(1) 特徴的政治社会事件・現象と政府・国家のプロパガンダ分析;(2) 劇作家・劇団の政治的コミットメントと政治社会的事件・現象に関する演劇表象分析;(3) 作品化される人種・ジェンダー・クイア・歴史に関する政治的演劇表象分析;(4) 関係資料収集・整理と研究成果の発表及び再検討。

## 3. 研究の方法

研究対象とする時代を大きく3期(第1期、20世紀転換期から第2次世界大戦;第2期、第2次世界大戦終結から冷戦期;第3期、ポスト冷戦から9.11を経て現在)に分割し、各時代について、人種、ジェンダー、クイア、帝国主義、資本主義、戦争、他者をキーワードに、作品、劇作家の第1次資料、劇作家・作品に関する先行研究と関連文献及び批評理論、劇作・上演に関わる文献・メディア資料、そして歴史・社会・政治・文化的資料を分析・検討し、アメリカの支配的パラダイムとの対抗/共犯関係から捉えた演劇の政治性・政治戦略を探った。また以下の4項目に留意した:(1) 特徴的政治社会事件・現象と政府・国家のプロパガンダ分析;(2) 劇作家・劇団の政治的コミットメントと政治社会的事件・現象に関する演劇表象分析;(3) 作品化される人種・ジェンダー・クイア・歴史に関する政治的演劇表象分析;(4) 関係資料収集・整理と研究成果の発表及び再検討。

## 4. 研究成果

(1) 20世紀100年のアフリカ系アメリカ人民衆史を10作の連作劇で描くオーガスト・ウィルソンの「20世紀サイクル」におけるアフリカ系アメリカ人共同体と人種的遺産継承の政治学を、20世紀の最初と最後の10年間を描く2作『大洋の宝石』(2004)と『ラジオ・ゴルフ』(2005)がサイクル全体構想の中で果たす役割と関係性の検討をとおして論じた研究「アフリカ系アメリカ人共同体、人種的遺産継承の政治学—*Gem of the Ocean*から*Radio Golf*へ」を日本アメリカ演劇学会第2回大会シンポジウム「オーガスト・ウィルソンの『20世紀サイクル』とその遺産」(2012年7月1日)で発表した。両作は時代の変遷に伴う物語展開とテーマの一貫性と方向性を図るべく周到に用意された20世紀アフリカ系アメリカ人物語の第1章と最終章で、両作をもって「サイクル」の長編歴史物語が完結する。サイクル10作のうち9作の舞台となるピッツバーグ、ヒル地区に形成される黒人共同体の状況とその変遷のなかで、1904年が舞台の『大洋の宝石』と1997

年を扱う『ラジオ・ゴルフ』に描かれる各々の時代で、黒人共同体とその遺産を継承し守る側と、白人社会の法と価値観に拠り所を見出す側が対立する。この同一人種内の対立構造は、ほぼ1世紀を隔てた作品舞台に解消されがたい葛藤として展開する。その一方で、『大洋の宝石』に見られた対立関係が『ラジオ・ゴルフ』において黒人共同体を守り継承する1つの血族の絆へと生まれ変わり、新たな戦士、継承者を生む。本研究はこの2作を結ぶストーリー・ラインを念頭に、自らを「戦士の魂」を持つ「政治的劇作家」と語ったウィルソンの政治学を、「サイクル」が描くアフリカ系アメリカ人共同体と人種的遺産の継承をめぐる問題系を通して考察し、最終的にウィルソンが描くコミュニティ像とその政治学を読み解き、彼の「20世紀サイクル」の遺産とその継承の意味を論じた。本研究をさらに展開した成果を「アフリカ系アメリカ人共同体、人種的遺産継承の政治学—『大洋の宝石』から『ラジオ・ゴルフ』へ」(『アメリカ演劇』第25号、2014)で発表した。

(2) 2012年、同性愛作家テネシー・ウィリアムズの劇作の政治学研究「テネシー・ウィリアムズ、亡霊のドラマトゥルギー—記憶、時間、エクリチュール」を第56回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム「アメリカ文学と亡霊」(2012年12月1日)で発表した。個人を抑圧・支配するアメリカ国家権力と帝国主義を批判する政治的アクティヴィズムを展開してきたウィリアムズは、晩年そのアメリカと変わらぬ姿勢で他者を性的に領有し、エクリチュールの糧としてきた自身の劇作活動と同性愛遍歴を内省『ヴィユ・カレ』(1978)と『曇ったもの、澄んだもの』(1981)を執筆する。問題は、両作の間に創作されたフィッツジェラルドと妻ゼルダを巡る「ゴースト・プレイ」、『夏ホテルへの装い』(1980)を経て、現在と過去の時空を超えた自己内省を図る亡霊劇へとウィリアムズが向かった点である。これら亡霊三部作は、『曇ったもの、澄んだもの』に至り、過去の亡霊との反復的交わりを通して2つの時空を浮遊する亡霊的存在へと劇作家ウィリアムズを変容させる。本発表を発展させた論考「テネシー・ウィリアムズ、亡霊のドラマトゥルギー—記憶、時間、エクリチュール」(『英米研

究』(大阪大学英米学会誌)第38号、2014)で、『曇ったもの、澄んだもの』を中心に、時空を超えた亡霊世界で自らのエクリチュールと性生活の相互関連的営為を描き出すウィリアムズ最晩年の自己内省的劇作行為を彼の劇作の政治学「亡霊のドラマトゥルギー」と位置付けて、そのあり様と目的、意義を論じた。

また、亡霊三部作の2作目、「亡霊劇」と副題が付せられた『夏ホテルへの装い』に焦点をあて、小説家夫妻フィッツジェラルドと妻ゼルダを巡る半伝記的物語の中に、ウィリアムズが自らのエクリチュールと性生活、姉ローズを含む親密な人々との関係性を読み込んだ点に着目し、本作をウィリアムズの自己内省を巡る自伝劇の変奏として考察した。この研究成果は「亡霊・狂気・罪悪感」をキーワードとしてウィリアムズのエクリチュールと私(性)生活を巡る自己内省演劇テキスト=亡霊劇のあり方を分析・再検討し、劇作家ウィリアムズの営為を新たな視座から論じた論考「エクリチュールと私生活を巡るウィリアムズ晩年の亡霊劇—亡霊・狂気・罪悪感」平成25(2013)年3月1日発行(『アメリカ演劇』第24号、2013)で発表した。

(3) 以上のウィリアムズ劇作の政治学と並行して、アメリカの国家・政府を告発するウィリアムズの政治学を研究した成果が、共著『アメリカン・ロード—光と陰のネットワーク』(英宝社、2013)所収の論考「国家的陰謀への反逆—テネシー・ウィリアムズ、SF、黙示録的政治劇」である。ウィリアムズは自ら社会主義者、革命家と名のり、社会的政治的圧制、ヴェトナム戦争、人種差別、同性愛者迫害に強い反対の意を唱えていた。本研究は60年代の中編小説『ナイトリー・クエスト』(1966)と75年初演の劇作品『レッド・デヴィル・バッテリー・サイン』を中心に、アメリカの国家・政府を見るウィリアムズの演劇政治学を検証したものである。上記2作はアメリカの軍産複合体の国家的陰謀に戦いを挑む社会的ミスフィットの反逆を描き出す。巨大軍需企業「プロジェクト」を爆破し、宇宙に旅立つ現代のドン・キホーテと変身するクイアの戦いを描くSFファンタジー『ナイトリー・クエスト』に対して、『レッド・デヴィル』は軍産複合体への抵抗の始まりを描く黙示録的政治劇である。本作

は、ヴェトナム戦争にまつわるレッド・デヴィル・バッテリー社の国家的陰謀の証拠を握る女性が反逆の戦士となって若きアウトロー集団とともに、ディストピア化した風景のなか、レッド・デヴィルに対峙する姿で幕となる。本作でケネディ暗殺、ジョンソンによるヴェトナム戦争続行、ニクソンのウォーターゲート事件を結ぶラインが、アイゼンハワーがその脅威を訴えた軍産複合体の陰謀となって浮上し、50年代から70年代、第34代から第37代アメリカ大統領に至る時代の軍産複合体国家体制に対する告発と反逆が前景化される。ここに、広島・長崎の原爆投下から朝鮮戦争に遡るアメリカの拡張政策と道徳的退廃、「死の商人」に変貌したアメリカを告発するまなざしが抽出し、ウィリアムズを国家的陰謀への反逆の騎士と論じた研究である。

(4) プロヴィンスタウン・プレイヤーズと活動した若き日のユージーン・オニールは、既存の商業主義演劇に対抗する小劇場による「新演劇」、言わば体制への反逆の演劇の旗手として劇作家の道を歩み始める。そのオニールが晩年に至って自身の家族と国家双方の物語を作品化するなかで、何らかの欲望や観念に憑かれたアメリカ人の姿を前景化する。日本アメリカ演劇学会第3回大会シンポジウム「オニールのアメリカ」(2013年9月29日)で発表した「ユージーン・オニール、反逆の演劇の軌跡—詩人、所有者、憑かれた者たちの弁証法」は、オニール作品に散見される詩人と所有者、憑かれた者たちの問題系を軸に、オニールのテーマ、ドラマトゥルギーの軌跡を、オニールと家族の関係性、1910年代のグリニッチ・ヴィレッジの対抗文化的風土と精神性を考察しつつ、検証したものである。これにより、アメリカに憑かれた劇作家オニールによる演劇政治学「反逆の演劇」とその軌跡を再評価し、アメリカを見たオニールのまなざしを論じた。最終的な本研究成果は「ユージーン・オニール、反逆の演劇の軌跡—詩人、所有者、憑かれた者たちの弁証法」(『アメリカ演劇』第26号、2015)で発表した。

(5) トニー・クシュナーの『エンジェルズ・イン・アメリカ』に描かれる80年代から90年代のアメリカと世界の政治的激変と世界

的災害の間テクスト的關係性からクシュナーが提示する災害を生き抜く政治学を分析・考察し、その研究結果を共著『災害の物語学』(世界思想社、2014)所収の論考「天界と人間界、災害を生き抜く政治学—トニー・クシュナーの『エンジェルズ・イン・アメリカ』」で発表した。エイズをはじめ、13世紀と17世紀のペスト、オゾン層の破壊、チェルノブイリ原発事故、地球温暖化、さらには天国の風景としての1906年のサンフランシスコ大地震など、地上と天国の災害と政治、歴史、人種、宗教を巡る問題系の関係性に着目し、「歴史的規模の災害をどう生き抜くか」を答えるべき問いとして論を進めた。作品中、アメリカと旧ソ連そして天界の硬直した保守的イデオロギーに対して、荒廃に際してなお変化し、新たな可能性を生む志向性が前景化される。終末論的カタストロフィーを前に、人類の進歩による災害と廃墟の爪痕を見つめなおし、過去の過ちを繰り返さない決意と進歩が孕む危険性への理解と意識をもって変革とコミュニティ創造に取り組む。《「荒廃」—「移動」—「変化」》のプロセスの中で育まれてきた志向性が、災害・荒廃に直面し、見慣れぬ地に移動し、新たな生活への変化に対応し、自ら変化を生みだしてきた人々の持つ精神性として示される。『エンジェルズ』最終場、ベデスタの泉に集うマイノリティ4人の姿は、災害・周縁化を生き抜いた人々が変革と新たなシステムを創り上げる精神性と彼らによるコミュニティ形成の可能性を論じた研究である。

(6) 「20-21世紀アメリカ演劇研究の政治学」に至る布石として19世紀のエドガー・アラン・ポーの演劇政治学を現代アメリカ演劇の視点から再検証した研究「黙殺される劇作と劇評—アメリカ演劇におけるポーのパフォーマンスとその評価」を日本ポー学会第7回年次大会シンポジウム「ポーとアメリカン・シアター」(2014年9月13日、慶應義塾大学三田キャンパス)で発表した。アメリカ演劇研究の世界で黙殺に近い扱いを受けてきたポーの演劇作品と劇評の謎を巡り、ポー唯一の演劇作品「ポリシャン」(1835)とアメリカ演劇論「アメリカ演劇」(1845)ほか数篇の劇評を、18・19世紀のアメリカ演劇の動向を参照しつつ検討し、劇作家・劇評家としてのポーのパフォーマンスとアメリカ演劇・演劇研究におけるポー評価の問題を検討した。最終的に本研究の成果は、「黙殺される劇作と劇評—アメリカ演劇におけるポーのパフォーマンスとその評価」(『ポー研究』第7号、2015)で発表した。

(7) 家族・個人・社会の関係性を中心に、21世紀アメリカ演劇における幸福追求の政治学を論じた研究「子供の死とパラレル・ユニバース David Lindsay-Abaire の *Rabbit Hole* をめぐって」を2014年度中・四国アメリカ文学会冬季大会シンポジウム「アメリカン文学における幸せの追求」(2014年12

月 13 日)で発表した。ラビット・ホール/パラレル・ユニバース物語を焦点化したナラティブとナラティブを介した登場人物間のコミュニケーションが、子供を亡くした夫婦にその現実を生きていけるだけの癒しを与えうるかどうかを検討した。子供の死に直面する夫婦の苦悩と葛藤が揺るぎのない現実として再現され、夫婦に癒しと新たな幸福が訪れるか否かは定かでないまま舞台が終わる。虚構を舞台に創造する演劇が、現実以上のリアリティを持って、夫婦・家族が直面する問いを投げかける。個人間のつながりが希薄になりつつある現代、子供の死による幸福の喪失を契機に、夫婦、親子、家族のあり方を、虚構を越えたりアリティによって問いかける 21 世紀家族劇の政治学を論じた本研究の成果は、「子供の死とパラレル・ユニバース デヴィッド・リンゼイ＝アペアーの『ラビット・ホール』をめぐって」(『英米研究』〔大阪大学英米学会誌〕第 40 号、2016)で発表した。

(8) エドワード・オールビーの『山羊—シルヴィアってだれ?』(2002)は、突如、山羊との獣姦を犯した人間として社会的成功と幸福な家族生活を失う危機に陥った著名な建築家とその家族をめぐって展開する。日本アメリカ文学会第 54 回全国大会シンポジウム「アメリカン文学における幸福の追求とその行方」(2015 年 10 月 11 日、京都大学)で発表した研究「タブーを犯した成功者—*The Goat, or Who Is Sylvia?* における幸福の追求と破壊」は、個人の「幸福の追求と破壊」をテーマした 21 世紀アメリカ演劇の「幸福の政治学」研究である。本研究で、アメリカン・ドリーム、禁忌行為、規範、暴力をキーワードに、獣姦者を異常者・疫病として排斥する社会慣習と支配的イデオロギーの市民への支配力と、社会的規範の許容限界点、及び本作の副題「悲劇の定義に向けた覚書」に示された現代の「悲劇」の意味とオールビーが本作の主題の一つに挙げた「寛容性の限界」を検討した。そして、人間が本来持つ他者を許容する心を蝕む疫病として支配的イデオロギーを同定し、寛容性の涵養が他者の幸福の追求と社会的パラダイムのインターフェイス拡大につながる可能性を論じた本研究の総括的成果は、2017 年度内(2018 年 3 月まで)出版予定の編著『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』(金星堂)で発表する。

(9) 2007 年出版の共著『神話のスパイラル アメリカ文学と銃』(英宝社)所収の論考「帝国支配の記号学 舞台の上の銃と他者」の研究内容を発展させ、ポストコロニアリズムの視点からアメリカに移植された帝国主義・植民地主義を再照射し、支配、歴史、他者を焦点化したアメリカ演劇の政治学論として論じた講演「アメリカ演劇の政治学 支配、歴史、他者」(第 4 回関西大学英米文学英語学会年次大会、2015 年 10 月 17 日、関西大学)

を行なった。舞台となる時代を下る形で、アーサー・ミラーの『黄金の時代』(1987)、ユージーン・オニールの『皇帝ジョーンズ』(1920)、アメリ・バラカの『奴隷船』(1967)と『奴隷』(1964)、スーザン＝ロリ・パークスの『アメリカ・プレイ』(1993)と『トップドッグ/アンダードッグ』(2001)、ヴェリーナ・ハス・ヒューストンの『ティー』(1987)の順に、コルテスによる銃器を使ったアステカ征服物語から、20 世紀・21 世紀に至るアフリカ系・アジア系アメリカ演劇に再現される帝国支配の物語を、ポストコロニアルな視座から通時的に分析し、再検討した。その結果、ヨーロッパによるアメリカ大陸征服に始まる地球を西回りにした他者征服・支配の帝国主義覇権拡大のベクトルが、ポストコロニアル状況で他者による逆方向のベクトルによって脱構築を受ける事態に遭遇する。本講演は、帝国主義による地球規模の他者支配の歴史を脱構築的に再表象する現代アメリカ演劇の政治学を論じたものである。

(10) 劇作の政治学を射程にユージーン・オニール『夜への長い旅路』(1956)をめぐり「抒情と不寛容」に関する研究「悲しみと痛み、憐憫のリリシズム—夜への長い旅路の果てに」を日本アメリカ文学会関西支部第 60 回支部大会フォーラム「不寛容な時代の愛 アメリカ文学における抒情の系譜」(2016 年 12 月 3 日)で発表した。本作最終場のモルヒネ中毒の幻覚症状を露わに独白するメアリーと、その姿に見つめる夫と息子 2 人、家族 4 人のタブローで幕を降ろす本作は、過去に憑かれた家族の姿に憑かれたオニール自身のカタルシスだった。劇場空間で観客が共有する劇作家オニールと家族の苦悩と痛みは、演劇という虚構世界と劇作家の現実、二つの層で存在する。演劇の審美体験と劇作家のリアリティに喚起される情緒が交錯して観客に憐憫を生み、それが劇場の枠を超えて一つの純粋な認知に昇華する。作家と作品の苦悩のリアリティによって、「憐憫と理解、寛恕」というオニールが『旅路』に込めた思いと『旅路』創作によって浄化された彼の思いを観客は共にする。これが、『旅路』終幕のメアリー独白と家族のタブローが纏うリリシズム、自伝劇を現代の悲劇に昇華した本作が醸し出すリリシズムの力であるとして、オニール劇作の政治学を論じた発表である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

1. 貴志雅之、書評「アフリカ系アメリカ人の「サイクル」—ヒル地区の地政学 桑原文子『オーガスト・ウィルソン—アメリカの黒人シェイクスピア』白水社、2014. xxvi+490pp.」『英文学研究 支部統合号』(日本英文学会) 査読無、9 巻、2017、pp.213-16.
2. 貴志雅之、「子供の死とパラレル・ユニバ

ース デヴィッド・リンゼイ＝アペアーの『ラビット・ホール』をめぐって』、『英米研究』(大阪大学英米学会誌) 査読無、40号、2016、17-39.

3. 貴志雅之、「黙殺される劇作と劇評—アメリカ演劇におけるポーのパフォーマンスとその評価」、『ポー研究』、査読無、7号、2015、49-68.

4. 貴志雅之、「ユージーン・オニール、反逆の演劇の軌跡—詩人、所有者、憑かれた者たちの弁証法」、『アメリカ演劇』、査読無、26号、2015、1-18.

5. 貴志雅之、「アフリカ系アメリカ人共同体、人種的遺産継承の政治学 — 『大洋の宝石』から『ラジオ・ゴルフ』へ」、『アメリカ演劇』、査読無、25号、2014、21-42.

6. 貴志雅之、「テネシー・ウィリアムズ、亡霊のドラマトゥルギー—記録、時間、エクリチュール」、『英米研究』(大阪大学英米学会誌) 査読無、第38号、2014、125-143.

7. 貴志雅之、「エクリチュールと私生活を巡るウィリアムズ晩年の亡霊劇—亡霊・狂気・罪悪感」、『アメリカ演劇』、査読無、第24号、2013、23-42.

〔学会発表〕(計8件)

1. 貴志雅之、「悲しみと痛み、憐憫のリリシズム—夜への長い旅路の果てに」日本アメリカ文学会関西支部第60回支部大会フォーラム「不寛容な時代の愛—アメリカ文学における抒情の系譜」2016年12月3日、京都学園大学.

2. 貴志雅之、講演:「アメリカ演劇の政治学 支配、歴史、他者」、第4回関西大学英米文学英語学会年次大会、2015年10月17日、関西大学.

3. 貴志雅之、「タブーを犯した成功者 *The Goat, or Who Is Sylvia?* における幸福の追求と破壊」、日本アメリカ文学会第54回全国大会シンポジウム:「アメリカン文学における幸福の追求とその行方」、2015年10月11日、京都大学.

4. 貴志雅之、「子供の死とパラレル・ユニバース David Lindsay-Abaire の *Rabbit Hole* をめぐって」、平成26年度中・四国アメリカ文学会冬季大会シンポジウム:「アメリカン文学における幸せの追求」、2014年12月13日、県立広島大学.

5. 貴志雅之、「黙殺される劇作と劇評—アメリカ演劇におけるポーのパフォーマンスとその評価」、日本ポー学会第7回年次大会シンポジウム:「ポーとアメリカン・シアター」、2014年9月13日、慶應義塾大学三田キャンパス.

6. 貴志雅之、「ユージーン・オニール、反逆の演劇の軌跡 詩人、所有者、憑かれた者たちの弁証法」、日本アメリカ演劇学会第3回大会シンポジウム:「オニールのアメリカ」、2013年9月29日、ザ・ホテル ベルグランデ.

7. 貴志雅之、「テネシー・ウィリアムズ、

亡霊のドラマトゥルギー—記憶、時間、エクリチュール」、第56回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム:「アメリカ文学と亡霊」、2012年12月1日、近畿大学会館.

8. 貴志雅之、「アフリカ系アメリカ人共同体、人種的遺産継承の政治学 *Gem of the Ocean* から *Radio Golf* へ」、日本アメリカ演劇学会第2回大会シンポジウム:「オーガスト・ウィルソンの『20世紀サイクル』とその遺産」、2012年7月1日、グリーンヒルホテル神戸.

〔図書〕(計2件)

1. 貴志雅之他、世界思想社、『災害の物語学』、2014、247-271.

2. 貴志雅之他、英宝社、『アメリカン・ロード—光と陰のネットワーク』、2013、5-27.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

貴志 雅之 (KISHI MASAYUKI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号: 30195226